

〈中学生部門〉

心の輪を広げる体験作文 優秀賞

母が障害者になって

宇都宮市立陽北中学校 二年 K・H

母は、僕が小学四年生の時に脳出血で倒れた。五ヵ月間入院したが、右半身麻痺が残り装具を付けて杖をつけて帰ってきた。母は一級障害者になった。僕は母が障害者になってしまった事を認めたくなかった。

母は、左手で炊事洗濯、お風呂の掃除など時間かけて頑張っていた。それを見ていた僕は、手伝いたい気持ちとどうすればいいのか分からない気持ちでいた。

夏休みになり、新型コロナの影響もあり家にいる時間が長くなり、母といる時間も増えた。一緒にいると母が出来なくなってしまう事が分かり、自然と手助けが出来ようになってきた。例えば、片手だと瓶の蓋が開けにくいとか洗濯が干しにくいなど、少しの手助けで母が楽になる事が多くなる様で、母も僕も嬉しかった。

母も外出ができる様になると嫌な思いをする。レジでお会計が遅いと後の客に舌打ちをされたり、急いでいる客のカゴがぶつかってきたり、障害者のマークの付いた駐車場に止めると歳のせい「何で年寄りじゃないのに止めてるんだらう」と思われ、ジロジロ見られる。駐車場の話は自分もよく分かった。母が障害者になる前は、目が見えないとか耳が聞こえないなどといった外見で分かりやすい

障害しか気付かなかった。でも、色々な種類やその重さがあり、外見だけでは判断が難しいものもあることが分かった。

「障害者は病院がタダになる」や「タクシー券がもらえる」など、健常者から見ると色々なサービスがついていて嫌みの意味の「いいなあ」とか、「障害者だからって……」の様な話をたまに聞いたり、目にしたりする。実際母も制度は助かるが、心が痛むらしい。

母は、障害者の友達がいる。その人は一緒に入院していた二つ上の女性で、同じ脳出血の右半身麻痺らしい。三年たった今でも連絡を取り励まし合っている唯一無二の友人だ。障害者同士でないと感じ合えないことも話し合える友人がいるということは家族としても安心だ。

誰だって障害者になりたくてなっている訳ではない。しかし、病気や事故、生まれつきで障害を持ってしまうことは誰にでも起こる可能性がある。僕が真近で母の障害を見てきて思ったことは、障害者健常者関係なくお互いが手を取りあって認めあって生きていく事が大切なのだということだ。

心の輪を広げる体験作文 優秀賞

心は同じ

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校 二年 猪瀬いのせ 琉花るか

私には一緒にゲームをしている友達がいいます。いつも一緒に遊んで、よく話して、とても大切な友達です。しかし、私もその友達もお互いの名前も、顔も、どこに住んでいるのか、何も知りません。私たちは、相手のことをくわしく知らなくてもわかりあえる、大切な友達なのです。

ある日、いつものようにゲームをしていると、友達が「実は」と話を切り出しました。聞いてみると、その子は軽い障がいがあるらしく、何日か入院するためその間は一緒に遊べないという話でした。その日、私は少しびびりして色々なことを考えてしまいました。言われるその瞬間まで、障がいがあることなんて全く気づくことも考えつくこともできません。例えば町中で白杖をついている人や、補聴器をつけている人がいたら、気づくのかもしれません。しかし、顔も声も、何も知らなかったために、その子の障がいに気づかなかったのです。これは言い換えてみれば、誰だって心は同じだ、ということなのです。そのような嬉しい気づきがあった反面、少し不安になってしまいました。もし彼女とゲームの中ではなく、実際に会っていたとしたら、今のようにならなくて話せる仲間になっていなかったかもしれない。それ以前に会うことすらなかったのかも

しれない、と。こんなことを考えるまでは、障がいを抱えた人たちを、どこか特別視して、色眼鏡で見ていたような気がします。私とは違うことを思って、考えているのだろう、とおかしなイメージを持つていたのだと感じました。

私も彼女も、心が同じなのです。いつだって彼女は明るく、元気でした。今日学校で起こった面白いことの話をして、なやみごとでも二人で相談しあって、そんな同じようなことが当たりまえにできるのです。いつか私が彼女と出会えるときがあったら、その時も最近読んだマンガの話や、昨日あった嬉しいことの話をしたいです。これからは誰とでもそんな風に話をできるように、「心は同じ」をしっかり胸に刻んでおこうと思います。また、誰もが同じように、固定観念を通さず見てもらえるような世界になると良いと思います。

心の輪を広げる体験作文 佳作

点字でつながる

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校 二年 上野 うえの 心瑠 みちる

私が点字を習い始めたのは小学五年生の時です。私が住んでいたところには、点字サークルという団体があり、興味を持ったので、始めてみました。

点字には、いくつかの道具が必要です。下にひく専用の板。点字を打つ場所を決める点字板。点字を打つ針のようなもの。間違ってしまったところを消すためにものなどたくさんさんの道具を使用します。最初は覚えなくてはいけないことがたくさんあり大変だったので、一年ほど経つと規則などが分かってきて楽しくなりました。

ある時、視覚障害を持つ方とお話させていただく機会がありました。せっかくだからと点字で分からないところや普段の生活の様子などを聞いてみようと思いました。しかし、視覚障害の方とお話するのは初めてで、健常者と話すときと同じようなしゃべり方をしてしまうと、なかなか話がつながらず、驚きました。話しているとだんだんとコツがつかめてきました。この時、健常者と視覚障害者とは感覚が少し違うのだなと感じました。

普段の生活でも、使っている道具やその使用方法など様々な違いがあり、改めて日常の常識が違うことに驚かされました。

お話の中で印象に残った言葉があります。それは、最後におっしゃっていた

「健常者は、私のような障害のある人たちをかわいそうというけれど、実際は嫌なことばかりではないんだよ。」

という言葉です。私は、障害者の方は苦労することがたくさんあるため、かわいそうだなと内心思っていたため、あの言葉には驚きました。ですが、あの方はとても楽しそうに話されていたので、本当に嫌なことばかりではないのだなと思いました。

私は、この日のお話でたくさんのことを学びました。まず、お話しするときには話し方や声、リアクションなど大きめにやること。普段の生活では、使用している道具などの違いがあること。そして、目が見えない人もできることはたくさんあるので、日々の生活はとても楽しいこと。

私は、この方のお話の経験をもとにこれからも点字を続けたり、ほかにもできることはないか探してみたいと思います。

心の輪を広げる体験作文 佳作

見た目と障害

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校 二年 石崎 いしざき さくら

皆さんは、「障害者」という言葉を耳にするどのような人か、浮かべますか。手足の不自由な人や目、耳の不自由な人などを大抵の人は、思い浮かべるのではないでしょうか。これらの障害は、車椅子を利用していたり、白杖を使用していたりと私たちが見て気づいてあげることの出来る場合が多いでしょう。しかし、世の中には目で見ても判断し難い障害もたくさんあります。今回は、これについてお話ししたいと思います。

私の妹は精神運動発達遅滞という発達障害を持っています。生まれてき言語習得、理解の遅れや読み書きの遅れがあったり相手の思考や感情を読み取る力、コミュニケーション能力が低かったりします。運動面でも同様に遅れが見られます。私の妹は大体三、四年の遅れがあり、本人は特に周りとの差を感じてしまっているのではないかと思います。きつと不安に思う事がたくさんある中でも、毎日笑顔で頑張っているのです。ところが周りの人からこの妹なりの「頑張り」を理解される事が難しい場合もある様でした。

ある日、妹が公園に行きたいと言いだしたので二人で一緒に近くの公園に行きました。妹は、周りの自分と同じくらいの子と遊びたくて仕方ない様でしたが、何と言ったら良いのか分からず、とり

あえず近くに寄ってみました。しかし、妹は空間認識能力も低いため、わざとではありませんが足を踏んだり、ぶつかったりしてしまっていました。また、遊具で遊ぼうとすると妹には難しく登ったり下ったりするのに時間が掛かっていました。でも周りから見れば何処にでもいる小学校中学年くらいの子、遊具で簡単に上手く遊べるのは当たり前という考えの人が多い様でした。それも幼い子供が遅い、早くしてと言うのなら、まだ幼く理解してもらおうのは難しいし仕方ないと思えますが大人でも関係ありません。どうしてこんなに遅いの、ぶつかられたとまるで嫌な物を見る様な目で見られることもあります。確にそんな気持ちになってしまうのは分かりませんがわざとではない、仕方ないのです。全ての人がこのような態度をする訳ではありませんが、やはり少なくないのが現実です。

私の妹のような場合は目で見て障害を持っているとはとても判断ができないので気づく事は難しいと思います。先程の体験談の様に極端に不得意とする事があるというのを理解して欲しい、理解しようとして欲しいです。これは障害を持っていない人と同じです。誰もが不得意とする事があります。ただ人それぞれ不得意の程度が違っただけです。障害を持っていてもいなくても同じ人間です。障害者に対して誰もが理解しようという気持ちを持って決して否定はしないで欲しいのです。私もきつと理解しきれない部分はまだあります。でも理解してあげたい、支えてあげたいという気持ちでいつも妹に接しています。この理解してあげたいという気持ちで障害を持つ人と持たない人の心がつながるきっかけになるのではな

いかと私は思います。是非皆さんも少し意識してみてはいかがでしょうか。新しい出会いが、待っているかもしれません。

心の輪を広げる体験作文 佳作

「障がい」と私たちの発展

栃木県立宇都宮東高等学校附属中学校 二年 青木 真優 あおき まゆ

みなさんは障がいを持つことをどう思いますか。あるいは障がいそのものについてどう思いますか。私は少し前まで、今までやってきたことができなくなってしまうたり、友達がいなくなったりしてしまうのでは？とっていました。また、関わり方が分からず、近寄りたさも感じていました。しかし、今思えばいつもと変わらぬ普通の態度で障がいを持つ子に接していたことがあったなと気が付くことがあります。

私が通っていた小学校には「あおば学級」というクラスがあり、様々な障がいを持つ子が毎日色々なことを学んでいます。障がいを持たない子が勉強するクラスと隣であるため、休み時間の際に通るかかるともありません。私はそのときに一つの驚きが出てきました。見た目では本当に障がい者？と思うぐらい、障がいを持たない子となんら遜色もない男の子がいたのです。その男の子は業間休みに障がいを持たない子と仲良く遊んでいたためまさかその学級にいるとは思いませんでした。そこで私は知的障がいや精神障がい、発達障がいなどの目にみえない障がいの存在について知りました。目にみえる障がいを持つ子もそれを持たない子と親しそうに接している意外と辛いことではないのかなと感じました。

中学一年生の頃に障がいの生活や障がいの種類、原因について学ぶ授業を受けました。肢体不自由の方の体験をしたり、自閉症の方が作った作品やピアノを弾くところを見たりしました。この授業で私が学んだことは、「障がいがあっても、何もできないわけではない」といふことです。また、その障がいを持っているからこそできる特技があることも学びました。

このように、「障がい」というものはけっして悪いもの、可哀想なもの、社会的不利になるものではなく、今後の学習上や生活上での困難を乗り越えるための要素あるいは手段です。障がいを持っている人もいなくても、みなさんの人生はみなさんが決め、まわりの人はあなたに多種多様な考え方を身に付けてくれるアドバイザーであると言えるでしょう。だから、分からなければまわりの人に質問したり、意見を求めたりして頼ってください。障がいがある人とならない人が枠を越えて共存し、互いを高め合える社会をつくることでさらなる私たちの発展を望むことができるのではないのでしょうか。私も自分を見つめ直し、どのようにしたら障がいがある人とならない人が共存して暮らすことができるようになるのか考えてみたいと思います。

心の輪を広げる体験作文 佳作

ふつう

宇都宮短期大学付属中学校 一年 渡邊 わたなべ 光琉 ひかる

小学一年生のときの私は、目が見えない人がいることを初めて知った。目が見えるということは、ふつうのことだと思っていた。目が見えない子ども達に初めて会ったのは、小学校のすぐ近くの盲学校だった。私達の小学校と盲学校は必ず毎年交流を行っていた。そのときこんな事を考えた。

「なんで目が見えないのに私達とあまり変わらないのだろう。」
目が不自由でも、元気で、明るくて、本当に楽しそうだった。なぜそのように振る舞うことができるのか。目が不自由で大変なはずだし、悲しいはずなのに、と当時の私は思っていた。ただ、もうこの考え方は全くの偏見だとしか言いようがない。目の不自由な方々もみんなと変わらない幸せを感じながら生きているのだと、今の私は知っている。また、その過程で、色々なことがあった。

一年の時が流れ、二年生のときでは、盲学校を見学した。その中で一番インパクトのあるものといえば、点字の本だろう。初めて手に取ったあの衝撃は、今でも忘れられない。ただの白紙の本だから。思ったらちゃんと点字があった。本の内容は全く分からなかった。それよりも目の不自由な人の手の感覚の鋭さを実感した。

三年生のときでは、私達の小学校に、ある少年がやって来た。高

学年と同じくらい身長だった。彼も目が不自由ではあったが誰にも負けない特技があった。それは、歌だ。彼の歌声は、音楽の教科書のCDの歌声よりも美しかった。みんながその声のとりこになっていた。

四年生のときからは、新型コロナウイルスの影響で、交流が途絶えてしまったが、代わりにある動物が学校を訪れた。盲導犬だ。一見、ペットの犬と変わらなそうだったが、その実力は想像以上だった。私達は実際にアイマスクを付けて、盲導犬を連れて、体育館を一周した。当然私はアイマスクを付けているので視界は真っ暗だ。いつも使っている体育館なので、所在地の予想はできるが、それでも少し怖かった。恐怖を感じながら進んでいると、盲導犬が止まった。ゴールにたどり着いたのだ。盲導犬は、目の不自由な方々にとっては、切っても切れない存在だった。

さて、ここまで目の不自由な人や盲導犬の交流についてお話したが、分かったことがある。それは、目が不自由ということに対して、特に何にも考えていないということだ。実際、みんなはとても楽しそうに接してくれていた。また、目が不自由な代わりに、他の感覚が優れていた。そのおかげで、点字が使えたり、音楽が得意だったりするのだ。つまり、私とはちがう、別の世界の中にいるのかもしれない。もう私は彼らのことをかわいそうだとは思わない。みんな楽しく生きているのだから。

